

# 京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5627 参照



※ P5633 参照



※ P5646 参照

2022.1  
No. 760

## 目次

### [巻頭言]

新しい年を迎えて ..... 5625  
総長 湊 長博

### [大学の動き]

- 「関西経済人・エコノミスト会議」京都大学・大阪大学・神戸大学 3 大学シンポジウムに参加 ..... 5627
- 令和3年度 On-site Laboratory シンポジウムを実施 ..... 5628
- 令和3年度定年退職予定教員 ..... 5629
- 小野薬品工業株式会社からの寄付による「小野薬品・本庶 記念研究基金」を設立 ..... 5633
- 第 79 回京都大学未来フォーラムを開催 ..... 5633
- 京都大学春秋講義(令和3 年度秋季講義)のオンライン講義を公開 ..... 5634

### [部局の動き]

- 「京大森里海ラボ by ONLINE 2021」を実施 ..... 5636
- 防災研究所が第32回防災研究所公開講座「激甚化し頻発する災害に備える」を開催 ..... 5637
- 京都大学国際シンポジウム「アジアにおける地球環境学の教育・研究 2021-コロナ後の国際連携再起に向けて-」をオンライン開催 ..... 5638

### [寸言]

ほんまかいな 犬塚 力 ..... 5640

### [随想]

最近の研究活動について ..... 5641  
名誉教授 三野 和雄

### [洛書]

古代シルクロードの人獣交叉譚から動物観を語る ..... 5642  
相馬 拓也

### [榮譽]

- 森 重文 高等研究院長・特別教授が文化勲章を受章 ..... 5644
- 飯間麻美 医学部附属病院助教が第3 回輝く女性研究者賞(科学技術振興機構理事長賞)を受賞 ..... 5645

### [話題]

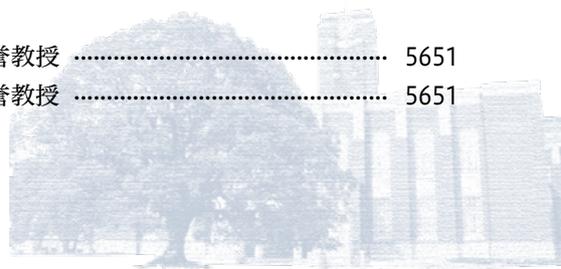
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施 ..... 5646
- 宇治キャンパスで2021年度安全衛生講習会を開催 ..... 5646
- 学生チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の世界大会「iGEM2021」で金賞を受賞 ..... 5647
- 京都大学研究資源アーカイブが「京都嵐山ニホンザル A 群全頭捕獲調査映像資料, 1971-1973」を公開 ..... 5648
- 京都大学研究資源アーカイブが「高エネルギー粒子照射材料透過電子顕微鏡写真, ca.1985-1997」を公開 ..... 5649

### [訃報]

上田 國寛 名誉教授 ..... 5651  
富永 茂樹 名誉教授 ..... 5651



京都大学



## 巻頭言

## 新しい年を迎えて

総長 湊 長博



新年あけましておめでとうございます。

昨年も、コロナに始まり、コロナに終わるとい  
う1年でした。昨年は都合3回、感染の波があり  
ましたが、本学ではその合間を縫うように、3月、  
4月は卒業式、入学式をなんとか無事に挙行し、  
10月からは対面授業を再開しました。夏場には附属病院に大変頑張っていたいただき、本学教職  
員をはじめ、多くの市民のみなさんにワクチン接種を実施しました。この様にしてなんとか乗り  
切ってきましたが、昨年末から、また、新たな変異株が出てきているという状況です。この変  
異株については、海外から断片的な情報が入ってきていますがまだその特性については不明の  
点もあり、注意深く見守って、臨機応変に対応していきたいと考えています。

また、昨年は、研究にかかる大きな不祥事がありました。このような不祥事が再び起こら  
ないよう、教職員一体となって全学的にシステム改革を進めているところです。

さて、今年はいよいよ創立125周年の年になります。1897(明治30)年に、勅令により京都  
帝国大学の新設が発表されました。政治の中心から離れた京都の地に、自由で新鮮な、そし  
て本当に真理を探究し学問を研究する学府としての大学をつくろうという機運が高まり、時の文  
部大臣、西園寺公望公の努力によって、勅令発布にいたりました。当時の新聞には「東京の帝  
国大学に対して関西の文運を振興せしめ『官臭を帯びざる』豪傑を養成することができる」と  
いう記事もあります。わが国でも独自に本当の学問を進めるべきという大きな社会の機運の中で、  
この京都帝国大学ができたといつていいと思います。我々は令和4年の今、そういう長い歴史を  
もつ大学で働いているということをあらためて認識しておきたいと思います。

本年は、本学にとって節目になる非常に重要な年です。今、国立大学をどのように強化して  
いくかということについて、国を中心に議論されていますが、国立大学がこれほど注目される  
というのはこれまでなかったと思います。国立大学の強化が日本全体の命運を握る非常に重要な  
要素であるということで、これから国立大学を巡り、さまざまな具体的な議論が起こってくる  
であろうと思います。我々には、非常に大胆な改革が求められてくるでしょう。そのような状況で、  
私は昨年、「任期中の基本方針―世界に輝く研究大学を目指して―」を公表しました。特に大  
学の運営に関連して、以下の3点を強調しておきたいと思います。

1点目は、意識、マインドの改革です。大学という組織は教員と職員が車の両輪であり、ど  
ちらの車輪にトラブルが発生しても車は真っ直ぐに進みません。この大事な時期に教職員が一体  
となり共通の目標に向かって、協力して進んでいかなければなりません。

2点目は、職場環境をオープンにするということです。昨今は、急速なテンポでさまざまな課  
題が突きつけられてきます。その様な状況では、「前例がない」「やったことがない」というのは  
通用しません。また、次から次へと新しい問題が起こる中で、その都度、臨機応変に対応して  
いかなければならない、そのために重要なのは、組織の垣根を超えて全体としてどれだけオー

## 巻頭言

プンな議論ができるかということです。

3点目は、多様性の尊重です。本学では、若手、女性、外国人の各教職員を増やしていくことを目指して、その対策を進めてきています。これは単に世の中の風潮がそうだからということではなく、複雑で困難な今の時代においてこそ、多様な意見が出てくるのが極めて大事だからです。いろいろな人が多様な立場から自由に発言する、そこから物事を決めていかなければ非常に危ういと思います。この様な時代だからこそ、年齢、性別、あるいは経験、その様なものに関係なく、とにかく皆が積極的に意見を発することが重要です。そのプロセスの中で各人の成果がきちんと評価される体制を整えていきたいと考えています。

創立から125年目を迎えた京都大学、この歴史ある大学が、もう一度原点に立ち返り力強く若々しい研究大学として新しい姿で成長発展していくことを、全教職員の共通の目標として、一致団結してこの難局を乗り切っていきましょう。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(令和4年1月5日(水)、事務職員を対象として開催した『総長年頭挨拶』より)

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## 「関西経済人・エコノミスト会議」京都大学・大阪大学・神戸大学3大学シンポジウムに参加

日本経済新聞社，日本経済研究センター主催，本学および大阪大学，神戸大学の協力により「『関西経済人・エコノミスト会議』京都大学・大阪大学・神戸大学3大学シンポジウム」が，「関西から創る未来社会～SDGsを育む」をテーマとして，10月13日（水），大阪市内にて開催されました。当日はオンライン配信を原則に開催され，関西の各大学関係者や関西経済人・エコノミスト会議関係者をはじめ，約500人の参加があり，本学からは湊 長博 総長が登壇，稲垣恭子 理事・副学長が出席しました。

シンポジウムでは新井 裕 日本経済新聞社常務執行役員大阪本社代表による挨拶の後，上田輝久 株式会社島津製作所代表取締役社長から，「科学技術で社会に貢献する」の社是のもと，乳がんの検査装置やがん光免疫療法の装置，下水中の新型コロナウイルスのモニタリングなど，時代の変遷に合わせて，大学とも共同研究を進めながら課題解決を進めてきたとの話がありました。

続いて，津川 悟 日本経済新聞社大阪本社編集ユニット長をモデレーターとして，湊総長，西尾章治郎 大阪大学総長，藤澤正人 神戸大学長，上田代表取締役社長，大津 愛 株式会社Compass代表取締役CEOの5名によるパネル討論を行いました。健康増進のために何ができるか，地球環境を守るために何ができるか，多様な人材をどのように育て，どのように活かすかの3点をテーマに，大学と企業とがSDGs達成に貢献できる役割について議論が行われました。各大学からはそれぞれの取組や研究内容について紹介があり，産業界からは大学の研究成果に対する社会実装への期待の声が上がりました。今年も産業界と大学が直接対話できる貴重な場となり，盛会のうちに終了しました。

本シンポジウムは，関西の産業界，学界で活躍される方々が集まり，オピニオン形成と交流促進を目的に，関西の地から未来社会を創造することについて考えるために開催されたものです。今後もこのような機会に参加し，産官学連携の推進とともに本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。



大学の取り組みを紹介する湊総長 会場の様子

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

## 令和3年度 On-site Laboratory シンポジウムを実施

国際戦略本部は、企画部国際交流課と連携して、令和3年度 On-site Laboratory シンポジウムを11月15日(月)に開催しました。今年度は、オンラインと百周年時計台記念館国際交流ホールにおける現地参加のハイブリッド形式で実施し、時任宣博 理事・副学長、稲垣恭子 理事・副学長、河野泰之 副学長のほか、ラボ関係者など約150名が参加しました。

On-site Laboratory事業は本学の指定国立大学法人構想において掲げた主要な取り組みの一つであり、海外の大学や研究機関等との共同研究を通じて、世界をリードする最先端研究を推進するとともに、大学への波及効果が見込めるような取り組みの実現を目指し、平成30(2018)年度に開始しました。本事業は今年度で4年目を迎え、各ラボの研究活動が活発化する中、国際共同研究をベースに確認されつつある波及効果について、好事例の共有を目的に実施しました。

シンポジウムは時任理事・副学長の挨拶で始まり、第1部は「学生・若手研究者の海外経験の促進と留学生リクルーティング」をテーマに、藤井滋穂 地球環境学堂客員教授(Mahidol環境学教育・研究拠点)、林 真理 医学研究科客員准教授(IFOM-KU国際共同ラボ)、堀毛悟史 高等研究院物質-細胞統合システム拠点准教授(スマート材料研究センター)がラボ独自の取り組みについて発表を行いました。発表後には、他のラボの代表者や、江上雅彦 副学長・大学院教育支援機構長、八木知己 理事補および縄田栄治 ASEAN拠点所長が加わり、河野副学長をモデレーターとして、学生・若手研究者の海外経験を促進するためのインセンティブや、海外の優秀な学生を本学に惹きつけるための方策等について、活発なディスカッションを行いました。



時任理事・副学長による開会挨拶

続いて、第2部では「研究ネットワーク形成と拡充」をテーマに、萩原正敏 医学研究科教授(京都大学サンディエゴ研究施設)、高岡昌輝 工学研究科教授(京都大学-清華大学環境技術共



第1部ラボ発表



第1部のパネルディスカッションの様子



第2部ラボ発表



第2部のパネルディスカッションの様子

大学の  
動き

同研究・教育センター) が発表を行いました。その後、木村俊作 産官学連携本部副本部長・特任教授をモデレーターとして、他のラボの代表者や日本貿易振興機構 (JETRO) 京都貿易情報センターの佐竹 晋 産学連携コーディネーターも加えてディスカッションが行われ、コロナ禍で研究ネットワークを維持・拡充させるための工夫や、ラボやアカデミア発ベンチャー企業からの共同研究先機関、海外機関投資家へのリーチと連携について、活発な議論が繰り広げられました。

最後に、稲垣理事・副学長が総括および閉会の挨拶を行い、シンポジウムは盛会のうちに終了しました。

今後も On-site Laboratory 事業をはじめとした国際共同研究拠点の継続的な発展と、研究力の一層の強化を促進していきます。



稲垣理事・副学長による閉会挨拶

(企画部 (国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

## 令和3年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員63名(教授50名、准教授7名、講師2名、助教4名)が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	佐々木 徹	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	イギリス小説, 特にディケンズに関する研究
	高橋 宏幸	文献文化学専攻 西洋文献文化学講座	西洋古典学, 特にラテン文学における表現技法の研究
	根立 研介	思想文化学専攻 思想文化学講座	日本美術史, 特に日本中世を中心とした仏師および肖像彫刻史研究
	水谷 雅彦	思想文化学専攻 思想文化学講座	現代倫理学研究, 特にコミュニケーションの倫理学に関する研究 応用倫理学研究, 特に情報倫理学に関する研究
	杉浦 和子	行動文化学専攻 行動文化学講座	都市空間分析, 地震防災研究, 近代地理学史研究, 辺境図・都市図の研究
教育学研究科	西平 直	教育学環専攻 教育・人間科学講座	教育人間学・臨床教育学・死生学に関する研究 稽古・修養・養生など日本思想に関する研究
	鈴木 晶子	教育学環専攻 教育・人間科学講座	学習および熟達に関する哲学・思想史研究 技術文明と人間性および倫理に関する研究
	岡野 憲一郎	附属臨床教育実践研究センター	精神医学, 精神分析学, 臨床心理学
理学研究科	堤 誉志雄	数学・数理解析専攻 基礎数理解析講座	非線形波動・分散型方程式に関する函数解析的および実解析的研究
	前野 悦輝	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	低温物理学, 特に超伝導体など量子物質の研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
理学研究科	谷 森 達	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙放射学講座	核ガンマ線天文学の開拓および核 ガンマ線画像化法の開発と応用研 究
	長 田 哲 也	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	天の川銀河中心部・星間空間等の 観測的研究
	吉 村 洋 介	化学専攻 物理化学講座	流体中の化学反応に対する物理化 学的研究
	竹 腰 清乃理	化学専攻 物性化学講座	固体試料における磁気共鳴分光法 の開発と生体・合成高分子・無機 非晶質固体試料を用いた応用研究
	矢 持 秀 起	化学専攻 物性化学講座	機能性有機導電体の開拓と解析
	杉 山 弘	化学専攻 生物化学講座	核酸の構造, 化学反応性, 機能発 現制御に関するケミカルバイオリ ジー研究
医学研究科	木 村 剛	医学専攻 内科学講座	心血管疾患に関する臨床的ならび に基礎的研究
	精 山 明 敏	人間健康科学系専攻 理工系医療科学講座	生体機能の可視化と定量化による 医学・生命科学への応用に関する 研究
工学研究科	北 條 正 樹	機械理工学専攻 機械材料力学講座	先進複合材料の疲労と破壊および 評価法国際標準化に関する研究
	野 中 鉄 也	機械理工学専攻 機械力学講座	歯車の強度設計に関する研究 歯車, 軸受けなどの機械要素で発 生する潤滑問題に関する基礎的研 究
	杉 山 文 子	航空宇宙工学専攻 航空宇宙システム工学講 座	繊維強化複合材の衝撃試験法に関 する研究 折り紙の展開収縮特性, 構造強化 特性の産業応用に関する研究
	小 林 哲 生	電気工学専攻 生体医工学講座	非侵襲脳機能計測・イメージング 法の開発とその神経科学・医療等 への応用に関する研究
	山 田 啓 文	電子工学専攻 電子物性工学講座	走査型プローブ顕微鏡による有機 分子材料および新規ナノ電子材料 のナノレベル構造・電子物性に関 する研究
	江 口 浩 一	物質エネルギー化学専攻 触媒科学講座	燃料・エネルギーキャリア変換の ための固体触媒反応および燃料電 池構成材料に関する研究
	村 上 正 浩	合成・生物化学専攻 合成化学講座	炭素-炭素結合活性化の研究 光エネルギーを駆動力として有機 合成に活用する研究 有機ケイ素化学の研究
	前 一 廣	化学工学専攻 環境プロセス工学講座	マイクロリアクターに関する研究 バイオマス転換反応工学に関する 研究 環境触媒, 浄化剤に関する研究
農学研究科	神 崎 護	森林科学専攻 森林管理学講座	熱帯林の多様性・動態と持続的管 理に関する生態学的研究
	岡 田 直 紀	森林科学専攻 森林生産学講座	樹木の水分生理と機能的木材解剖 学に関する研究
	松 井 徹	応用生物科学専攻 動物機能開発学講座	動物におけるビタミンとミネラル の機能と代謝に関する研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農学 研究科	刑 部 正 博	地域環境科学専攻 生産生態科学講座	植物ダニ類の生態遺伝学的研究と 防除技術開発 殺ダニ剤抵抗性機構に関する分子 遺伝学的研究
	中 嶋 洋	地域環境科学専攻 生物生産工学講座	農業システム工学, 中でも計算力 学を用いたテラメカニックスの研 究
	梅 津 千恵子	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	農村世帯および農業セクターの資 源管理と環境変動に対するレジリ アンスに関する研究
人間・環境学 研 究 科	多 賀 茂	共生人間学専攻 人間社会論講座	フランス思想(18世紀, 現代), 欧州社会の根幹を形成する理念, 精神医学史, 制度を使う精神医療 等の研究
	奥 田 敏 広	共生人間学専攻 思想文化論講座	ドイツ文学に関する研究 トーマス・マン研究 近代芸術とその素材としての伝説 に関する研究
	赤 松 紀 彦	共生文明学専攻 比較文明論講座	中国古典演劇史, とりわけ元雜劇 に関するテキスト研究ならびに崑 曲の上演様式等に関する研究
	杉 山 雅 人	相関環境学専攻 自然環境動態論講座	天然水試料の高感度化学分析法の 開発に関する研究 水圏の生物地球化学過程の比較研 究
エネルギー科学 研 究 科	岸 本 泰 明	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー物理学講座	構造形成を基軸とした非線形・非 平衡性に支配される核融合・光量 子プラズマに関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	重 田 眞 義	アフリカ地域研究専攻 アフリカ潜在力講座	民族植物学, アフリカにおける農 業の人類学的研究, 在来知研究, 睡眠文化論
情報学研究科	松 田 哲 也	システム科学専攻 システム情報論講座	医用工学, 医用画像処理, MRI 撮 像法, 心臓MRI診断に関する研究
生命科学 研究科	千 坂 修	高次生命科学専攻 生命科学教育学・遺伝学 講座	分子発生学, 特に動物後脳部由来 器官形成機構の研究
総合生存学館	寶 馨	総合生存学専攻	豪雨・洪水の水文頻度解析 降水流出過程のモデリングと予測 防災技術政策に関する研究
経営管理研究部	戸 田 圭 一	経営管理講座	都市水害とその対応策に関する研 究 地下空間の防災に関する研究
化学 研究所	渡 辺 宏	複合基盤化学研究系	ソフトマター系のダイナミクスと レオロジーに関する研究
ウイルス・再生 医 学 研 究 所	竹 本 経 緯 子	ウイルス感染研究部門	生物ゲノムの内在性レトロエレメ ントを制御するエピジェネティッ ク機構に関する研究
	戸 口 田 淳 也	再生組織構築研究部門	間葉系組織の発生, 分化, 退行性 変化, 再生および癌化に関する研 究とその成果の臨床応用
	藤 本 真 慈	再生組織構築研究部門	マウス T 細胞レセプター遺伝子組 換え機構の研究

大学の  
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
ウイルス・再生 医科学研究所	小 柳 義 夫	生命システム研究部門	エイズウイルスの分離・同定、その遺伝子の機能評価と動物モデルの構築、病原性機序の解明に関する研究
エネルギー理工学 研 究 所	小 西 哲 之	エネルギー生成研究部門	核融合工学の研究 核融合炉機器とエネルギーシステムの開発・設計・評価研究 サステナビリティ学
	小 瀧 努	エネルギー利用過程研究部門	バイオマスの有効利用に関する生化学的研究
防 災 研 究 所	Mori, James Jiro	地震防災研究部門	断層の温度測定による、大地震の破壊の摩擦レベルを推定する研究
	西 上 欽 也	附属地震予知研究センター	地殻内の地震発生域における不均質構造の研究、および注水実験による野島断層の深部構造と誘発地震の研究
	橋 本 学	附属地震予知研究センター	測地学、特に測地データの解析による地震・火山性・テクトニックな地殻変動の研究
	釜 井 俊 孝	附属斜面災害研究センター	応用地質学、特に地すべり・崩壊現象解析、防災考古学、および都市域の斜面未災学に関する研究
	田 中 茂 信	附属水資源環境研究センター	水災害およびその防災に関する研究、水文極値に関する研究
霊長類研究所	高 田 昌 彦	神経科学研究部門	ウイルスベクターを用いた霊長類脳への外来遺伝子導入による高次脳機能の解明に関する研究
	鈴 木 樹 理	附属人類進化モデル研究センター	サル類の実験動物学的研究
生態学研 究 セ ン タ ー	高 林 純 示	生態学研究部門	植物-節足動物間、植物-植物間の相互作用に関する化学生態学的研究
フィールド科学 教育研究センター	中 島 皇	森林生態系部門	砂防学を基とする森林保全に関する研究 森林教育に関する研究
学生総合支援 セ ン タ ー	村 上 嘉 津 子		青年期のコミュニケーションおよび発達障害学生幼少期における言語の成立と身体性（感覚と感情）に関する研究
国際高等教育院	長 谷 あ き ら	生物学教室	植物の光応答の分子機構の研究
	菊 谷 達 弥	社会科学教室	組織の経済学、契約理論、企業間関係に関する研究
環境安全保健機構	戸 崎 充 男	放射線管理部門	原子核反応を伴う原子過程に関する研究 放射線計測の先端的開発研究 放射線教育に関わる教材装置の開発
情報環境機構	永 井 靖 浩	IT企画室	経営情報システムに関する研究

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の  
動き

## 小野薬品工業株式会社からの寄付による「小野薬品・本庶 記念研究基金」を設立

小野薬品工業株式会社からのご寄付によって、「小野薬品・本庶 記念研究基金」を設立し、12月13日(月)に記者会見を行いました。

当該基金は、本学における独創的な基礎研究と小野薬品工業株式会社による粘り強い開発と事業化努力により、画期的ながん治療薬の実現に至ったという、産学連携活動の目覚ましい成果に基づくものです。

今回のご寄付に際し、湊 長博 総長から、小野薬品工業株式会社 相良 暁 代表取締役社長の本学の活動に対する深いご理解と格段のご支援に対して、謝辞を述べました。

本学は、当該基金によって、わが国の将来の学術研究の推進を担う生命科学を主とする自然科学分野における優秀な若手研究者の育成とその研究環境の強化を実現し、国民の福祉と健康および社会の発展に貢献していきます。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)



左から、湊総長、相良代表取締役社長

## 第79回京都大学未来フォーラムを開催

第79回京都大学未来フォーラムを12月10日(金)に開催しました。今回のフォーラムは、「働く人生のアップデート」をテーマに、薬学部出身の野崎治子 株式会社堀場製作所理事と、経済学部出身の仲 暁子 ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEOを講師に迎え、会場とオンラインで開催しました。

フォーラムは久能祐子 理事からのビデオメッセージで始まり、講師からの講演に移りました。野崎氏の講演では「人生やって無駄なことはない!」と題して、やりたいことを見つける秘訣の一つとして、目の前のことをおもしろいと思って全力で取り組むことがあげられました。続いて仲氏の講演では、「シゴトでココロおどろう」と題して、終身雇用制度が崩れ



講演をする野崎氏



オンラインで講演をする仲氏

大学の  
動き

つつある現代においてはスキルや人脈といった「無形資産」を持つこと、夢中になれるものを見つけることの重要性が語られました。

パネルディスカッションは稲垣恭子 理事・副学長をモデレーターとして、組織の育て方に関する議論や寄せられた質問への回答を行いました。最後に、野崎氏からは仕事を楽しむために、



パネルディスカッションの様子

「しなやかに! したたかに! しぶとく!」と、仲氏からは社会がよりよくなるよう貢献しながら、満足した最期を迎えられるように生きるために、「命をどう使うか」という言葉が参加者に送られました。

講演後、視聴者からは、「大企業とスタートアップ企業のそれぞれの立場が共通するところ、異なるところがある意味浮き彫りになって一層興味を持ちました」、「とても心に響きました」などの感想が寄せられました。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

## 京都大学春秋講義(令和3年度秋季講義)のオンライン講義を公開

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、1988(昭和63)年秋から開講している公開講座です。

前回に引き続き、今回も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、10月25日(土)より12月26日(日)までオンラインにて配信しました。メインテーマを「ウイルスと免疫」として、河本宏 ウイルス・再生医科学研究所教授から「新型コロナと免疫: 免疫は味方が敵か? ワクチンの仕組みは?」、石見拓 環境安全保健機構教授から「日々の健康情報の管理と活用—PHRの活用」、谷史人 農学研究科教授から「フードプロセスから見た食品素材の免疫機能」と題した講義を行いました。

全国の2,000名を超える方から申し込みがあり、参加者からは、「免疫の基本からコロナの現状・今後についてまで、全体にわたり解説してくださり、理解することができた」「丁寧な説明と、



講義をする河本教授



講義をする石見教授



講義をする谷教授

大学の  
動き

事前に募集した質問に対する回答があり、非常に質の高い講義だった」「以前から興味を持っていたが、詳しく聞いたことでより面白く意義深い研究だと感じる事ができた」など多数の好評の声が寄せられました。

なお、当配信は配信期間終了後も「京都大学YouTubeチャンネル」にて公開しています。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)



## 「京大森里海ラボ by ONLINE 2021」を実施

学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育研究ユニットでは、「京大森里海ラボ by ONLINE 2021」を10月31日(日)に実施しました。

同ユニットでは、高大連携事業に力を入れています。本イベントはフィールド科学教育研究センターおよび野生動物研究センターとの共催で実施し、地球環境学、学術情報メディアセンター、生態学研究センター、こころの未来研究センターの協力のもと、全国12校の高校生とともにワークショップを行いました。

本年は「2030年の私と森里海連環」をテーマとし、SDGs目標年である2030年における高校生自身・地域・社会について、その未来や理想像を考え、その理想像を実現するためにはどうすればいいのか、今何をすべきかを議論することを目的としました。

イベントは、徳地直子 森里海連環学教育研究ユニット長・フィールド科学教育研究センター教授の開会挨拶で始まり、「この10年間における地域の変化」をテーマとした各高校の発表動画を流した後、高校生にとっては先輩となる本学大学院生から、高校生時代に考えていたこと、進路をどのように決めたのか、今後どのような方向に進むのかといったことを話題提供しました。

次に、徳山奈帆子 霊長類研究所・野生動物研究センター助教より「ヒトとボノボが共に生きるアフリカの森で考えたこと」、篠原義昭 京都府海洋センター主任より「守りながら獲る 京都の漁業-宮津湾のナマコ漁を中心に-」と題した2つの基調講演が行われ、社会人・研究者の視点での話がありました。

午後のグループワークでは、6グループに分かれ、オンラインホワイトボードを活用して、



徳地ユニット長の開会挨拶



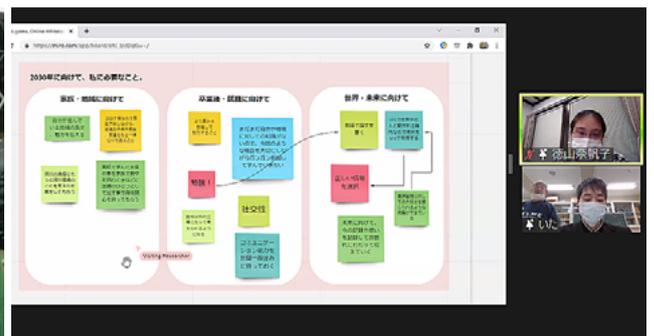
大学院生からの話題提供



篠原主任による基調講演



グループワークの様子



グループワーク発表の様子

部局の  
動き

2030年の社会のあり方と自分の姿を想定し、2030年に向けて今の自分に必要なことについて議論しました。続いて各グループが検討状況を発表しました。

最後に朝倉 彰 フィールド科学教育研究センター長による講評および閉会挨拶があり、本イベントは終了しました。



朝倉センター長の閉会挨拶



実施本部の様子



記念写真

(学際融合教育研究推進センター)

[目次に戻る](#)

## 防災研究所が第32回防災研究所公開講座「激甚化し頻発する災害に備える」を開催

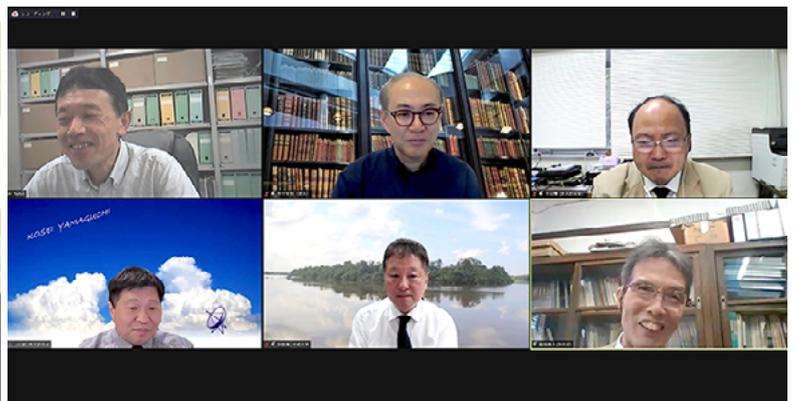
防災研究所では、第32回公開講座「激甚化し頻発する災害に備える」を10月19日(火)にオンラインで実施しました。

自然災害が多いわが国ですが、近年、気候変動の影響などもあり、災害が激甚化するとともに頻発するようになっており、これまでの災害対策や心構えでは通用しなくなっています。このような状況を踏まえて、激甚化し頻発する災害に対して、どう備え対処すべきかについて同所の5名の研究者が講演し、最後に質疑応答が行われました。

例年、本公開講座は、自治体の危機管理室や消防局、防災関係のNGO、企業関係者等の実務家の参加が半数以上を占めており、土木学会の継続教育プログラムにも認定されています。



主催者挨拶をする中北英一  
防災研究所長



上段左から、境 有紀 防災研究所教授、矢守克也 同教授(司会)、王 功輝 同教授  
下段左から、山口弘誠 同准教授、堀 智晴 同教授、飯尾能久 同教授



今回も例年同様、多数の実務家が参加し、講演中は常時200名程度のアクセスがありました。参加者からは、本公開講座で得られた知見を実務に生かしていきたいという感想も寄せられました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

## 京都大学国際シンポジウム「アジアにおける地球環境学の教育・研究 2021-コロナ後の国際連携再起に向けて-」をオンライン開催

京都大学国際シンポジウム「2021年アジアにおける地球環境学の教育・研究-コロナ後の国際連携再起に向けて- (Kyoto University International Online Symposium 2021 on Education and Research in Global Environmental Studies in Asia -Restarting International Cooperation after Covid-19 Pandemic-)」を11月29日(月)および30日(火)にオンライン開催しました。コロナ禍の影響により昨年に引き続きオンラインの開催となりましたが、アジア諸国を中心に21カ国61組織から研究者や学生338名が参加登録し、1日目は176名、2日目は254名が参加しました。

1日目は、勝見 武 地球環境学堂長による開催の辞から始まり、次に縄田栄治 国際戦略本部ASEAN拠点所長が、コロナ禍におけるこの1年間の京都大学の取り組み、今後の国際連携の展望について基調講演を行いました。その後、インドネシア・IPB大学、タイ・マヒドン大学、中国・清華大学、ベトナム・フエ農林大学の各連携大学からコロナ禍における大学運営に関して報告があり、続くパネルディスカッションで活発な意見交換と情報共有が行われました。

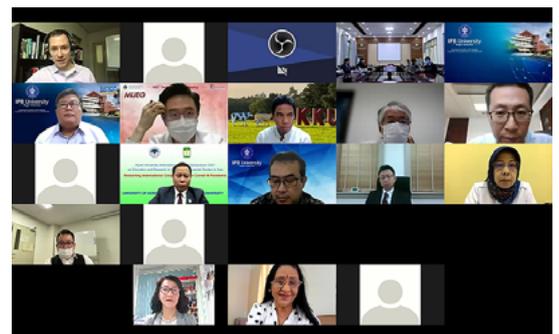
2日目は、まず若手研究者と学生によるポスター発表(①工学、②農学・森林学・生物学、③都市農村開発、④政策・経済・文化の4分野)の質疑応答セッションでさまざまな討論がなされました。次に同じく4分野に分かれ、優れた成果を挙げる若手研究者を招へいた研究発表セッションを実施し、最新の研究成果を基点に活発な



シンポジウムのウェブサイト



縄田栄治教授によるオープニングスピーチ



パネルディスカッションの様子

部局の  
動き

議論が交わされました。最後に、選考委員会によって選出されたベストポスター賞の表彰式が行われ、舟川晋也 地球環境学  
堂教授による閉会の辞をもって、2日間にわたる国際シンポジウムが閉幕しました。

コロナ禍にもかかわらず、多くの参加者から有意義な2日間であったという感想が寄せられ、継続的に国際シンポジウムを実施することの重要性を改めて認識しました。



各分野のポスター賞授与

(地球環境学堂・地球環境学会)

[目次に戻る ↗](#)

## 寸言

## ほんまかいな

犬塚 力



3年ほど前から毎朝瞑想をしている。きっかけは、ある日スマホをいじっていて瞑想のアプリというものがあることを知り、何気なくダウンロードした、ということだったが、それ以来早朝ルーティンに組み込んで続けている。

とはいっても、毎日たった5分程度の短時間瞑想をやっているだけなので、全然大した話ではない。また、「瞑想 やり方」でググってみると、「今、ここに意識を集中する」とか書いてあるが、ぼくは3年経っても集中できた試しがない。その道に詳しい方からすると瞑想を語る資格はないレベルである。

では3年間もいやいや続けていたのかというとそうでもない。瞑想が終わった後の心地よさをほぼ毎回感じているから継続している。

少し具体的に言うと、大抵の場合何らかのストレスというか嫌なこと、考え事を引きずって瞑想をスタートする。しばらくはその考えから離れられない。そして、少し時間が経ってから「あれ、なんでこんなことを考えてるんやろ?」と考え始める。意図的というよりもほぼ自然に。考えていることを考える、ということだろうか。ある意味、自分を客観的に見つめる、ということかもしれない。そうすると、当初考えていたことに引きずられていることがなんとなくつまらなくなり、気分が爽快になる。

5分でそんなにコロッと考え方が変えられるのか? と疑問を持たれる方、是非一度お試しください。5分って案外長いです。

で、よくよく考えると、瞑想中に限らずそのような気持ちの切り替えを若い頃からやっていたような気もする。楽天的すぎるのか、単にアホなのかもしれないが、あるネガティブな考えに対して別の側面から考えると全く違う要素が見えてきてポジティブな気分になる、ということこれまででの人生で繰り返してきたように思う。

この思考パターンは、自分の心の中にだけ向けられたものではないようだ。世の中の様々なステレオタイプ的な考えや意見に対して、ほぼ常に、「ほんまかいな?」とまず考えてしまう癖がある。自分なりに考えてみて、納得がいけば受け入れるし、納得がいかなければ受け入れを拒否する(サラリーマンなので態度には出さないケースもちろんあります)。

この癖、いったいどこから来たのか? ルーツはどこか? というのは自分でもよくわからないが、京都大学の「自由の学風」には合っていたように思える。そもそも京都大学が自由な校風だということそのものがステレオタイプ的な感じがしないでもないし、自分が京大生だった頃にはそういう実感は持っていなかった。しかし卒業し就職してから出会った京大出身者は、かなりの確率で、いわゆる京大出身者的な、自由な発想の人たちだった。血液型の性格判断よりも当たる確率は高いのでは?と思ったりする。

ということで、京大生の皆さん、世の固定観念に惑わされず、常に「ほんまかいな?」と考えながら、自由を謳歌してください!

(いぬづか りき、中部国際空港株式会社代表取締役社長、昭和57年法学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

## 最近の研究活動について

名誉教授 三野 和雄



本欄は京大を定年退職された方たちが執筆されているが、過去の記事を読むと定年後も活発に研究を続けておられる先生方が多いようである。私の若い頃に比べると、寿命の伸びにもなって、いずれの分野でも学者の平均的な研究活動期間は長くなっている。中には、定年後に大著を著したり、海外の研究機関に請われて、晩年になってから研究活動の拠点を移す研究者もいる。また原則として定年制が廃止されているアメリカの大学では、80歳を越えても元気に学部の大きなクラスを教えている人がいたり、高齢の研究者がノーベル賞を受賞した後も若い研究者たちと競ってトップジャーナルに論文を発表し続けているという話も聞く。若手の研究者と違い、高齢者が研究業績をあげることの直接的なメリットは少ないから、高齢になっても活発に研究を続けている人の多くは、純粋に研究が好きだという究極のインセンティブに支えられているのだろう。

私自身は、2015年に経済研究所を定年退職した後、同志社大学に5年間勤め、現在は経済研究所の非常勤教員として研究を続けている。上で例示をしたようなめざましい活動ができているわけではないが、新しい知識を得たり、新しいテーマで論文を書く意欲は今のところそれほど下がっていない。もちろん、難しい論文を読み解いたり、細かい計算を続ける根気と体力は若い頃より低下しているし、体調も万全であるとは言えない。ただ、経済学は数学や統計学を多用するので他の社会科学に比べると研究形態が理系に近い面があり、最近では共同で研究することが常態になっている。私も最近の研究の大半は共同研究であり、共著で論文を書いている。当然ながら、共同研究者の大半は私より若い。そしてその多くは、私が以前大学院で直接指導をしたり、担当した講義の受講者だった人たちである。かつての教え子たちと共同で研究をして、今度は私が彼らから教えられたり、助けられたりしている。教師冥利に尽きるとはまさにこのことであり、大変ありがたいと思う。もし一人だけで研究を続けていたら、現在の活動水準は保てていなかっただろう。研究が好きだということに加え、若い人たちと対等な立場で仕事をしたいという動機も私の研究活動を支えている。

30年にわたる低成長、少子高齢化、膨大な政府債務、さらにコロナ禍のショックなど、日本経済は問題山積である。経済学がこれらの難問の解決に役立っていないという批判も多いが、経済学そのものは着実に進歩している。経済学の進展にわずかでも貢献ができるように、これからも健康が許す限り努力を続けたいと思う。

(みの かずお, 平成 27 年退職, 元経済研究所教授, 専門はマクロ経済学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

# 古代シルクロードの 人獣交叉譚から動物観を語る

相馬 拓也

妖怪や幻獣とは、人間の動物に対する祈りと畏れ、そして怯えの表現形式なのだろう。ユキヒョウ(図1)、イヌワシ(図2)、オオカミ(図3)…孤高の気高い動物たちには、きっと誰もが魅了されたに違いない。シルクロードは、そんな動物とニンゲンたちが交叉する「出会いと別れの物語」であふれている。



モンゴルの愛馬と



図1 多摩動物公園のユキヒョウ



図2 カザフ鷲使いのイヌワシ



図3 シルクロードに多数生息するハイロオオカミ

古代シルクロードには、グリフォン、ペガサス、白虎、怪狼など、幻獣から妖怪までさまざまな類の動物図像が、考案されたり、観察されたりした。たとえば古代中国の地理書『山海経』に現れる天狗(図4)は、どちらかというとおオヤマネコ *Lynx lynx* とオオカミの合成獣のようにも見える。額に紋のあるヒョウといわれる孟極(図5)とは、ユキヒョウのことなのではないか。羴羊(図6)のように、バーラル *Pseudois nayaur* をそのまま模したのではないかという妖獣も出てくる。またシルクロードから伝わったといわれる法隆寺の「獅子狩文錦図」の馬も、じつはよく見るとペガサスではないか! 魔人ケンタウロスも、人馬一体となってギリシアに襲い掛かった、スキタイ系遊牧民がその原型にあると言われる。ニンゲンが地球の支配者だと錯覚するずっと以前、草原や山岳に暮らす人々は、動物たちの並外れた生命力に、憧れと畏敬の念を抱いていたに違いない。



図4 天狗

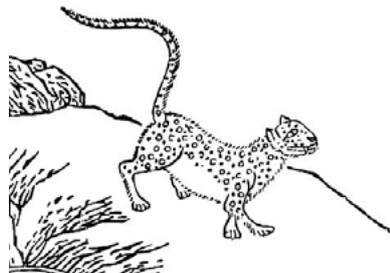


図5 孟極



図6 羴羊

これらキメラ型複合異能獣は、畏れと怯え、そして王権や支配者の象徴の誇示としても用いられる。オオカミに育てられたロムルスとレムスのローマ帝国創世神話に見られるように、チン

## 洛書

ギス・ハーン一族も「蒼き狼と白き女鹿の末裔」だと語られ、さらには古代の烏孫民族（キルギス人やカザフ人の始祖ともされる）もオオカミの乳を飲み、鷹から肉を与えられて育ったと伝えられるように。動物は人知のおよばぬ異能の存在と畏れられ、ニンゲンもそれにあやかりたかったのだろう。貴種流離譚ならぬ、人間界と動物界を越境した「人獣交叉譚」こそが、動物界をも無双するパワーの源として、古代世界の支配者には必要だったに違いない。

人知を超えた動物との交叉とは、「動物の擬人化」であり、「人間の擬獣化」の試みでもあったことがわかる。『もののけ姫』でも、『風の谷のナウシカ』でも、人間界と動物界の越境の試みは謝絶される。そして「鶴の恩返し」や「蛇女房」などの昔話の出会いでも、かならず別れが繰り返される。そんなニンゲンと動物の違いを区別するものを、太宰治は『斜陽』で「秘め事」と語らせ、押井守は「記憶」と言い表していた。わたしはあえて「支配欲」とでも言っておきたい。どんな動物もきっと、人間の世界を支配したいなどと言わないだろうから。

（そうま たくや，白眉センター（野生動物研究センター受入）特定准教授，  
専門は人文地理学・生態人類学・動物生態学）

[目次に戻る ↗](#)

## 栄誉

## 森 重文 高等研究院長・特別教授が文化勲章を受章

森 重文 高等研究院長・特別教授が令和3年度文化勲章を受章し、11月3日(水)、皇居において親授式が行われました。

森特別教授は、昭和48年京都大学理学部を卒業、同50年同大学大学院理学研究科修士課程を修了、同年同大学理学部助手に就任、同53年理学博士の学位を授与されました。その後、昭和55年名古屋大学理学部講師、同57年同大学理学部助教授、同63年同大学理学部教授、平成2年京都大学数理解析研究所教授、同23年～同26年同大学数理解析研究所長を経て、同28年同大学高等研究院長・特別教授に就任し、現在に至ります。

森特別教授は、代数幾何学の分野において、代数多様体の極小モデル理論の発端となる「森理論」を考案し、数理科学の広範な分野に大きな影響を与えました。代数幾何学とは、いくつかの多項式からなる連立方程式の解の集合として描かれる図形(代数多様体)を研究する学問です。3次元以上の代数多様体は非常に複雑であり、1次元・2次元とは全く異なる新たな観点での解明が必要であることから、「高次元代数多様体の分類」は代数幾何学における最も中心的な課題の一つでした。森特別教授は、ハーツホーン予想を解決したことにより、この問題を解決する端緒を開きました。特に3次元射影多様体の構造定理を示したことは、高次元代数多様体を理解する道筋を示す画期的なものでした。さらに3次元コニック束を含む3次元代数多様体の端収縮射の分類など重要な問題で成果を上げ、近年の高次元極小モデル理論の発展に大きく貢献しました。

なお、森特別教授の卓越した業績に対し、日本数学会彌永賞、日本数学会賞秋季賞、井上学術賞、アメリカ数学会コール賞、日本学士院賞、フィールズ賞、藤原賞、日本数学会賞小平邦彦賞、京都府文化賞特別功労賞など、多数の賞が授与されています。さらに、平成2年には文化功労者として顕彰されました。これまでに、米国芸術科学アカデミー外国人名誉会員、日本学士院会員、ロシア科学アカデミー外国人会員、米国科学アカデミー外国人会員に選出されています。また、アジアから初めて国際数学連合総裁に選出され、平成27年～同30年まで務めました。

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)



## 栄誉

**飯間麻美 医学部附属病院助教が第3回輝く女性研究者賞  
(科学技術振興機構理事長賞) を受賞**

飯間麻美 医学部附属病院助教が第3回「輝く女性研究者賞(科学技術振興機構理事長賞)」を受賞し、11月3日(水)に表彰式が行われました。

「輝く女性研究者賞(ジュンアシダ賞)」は、科学技術振興機構(JST)が主催となり、女性研究者の活躍推進の一環として、持続的な社会と未来に貢献する優れた研究等を行っている女性研究者およびその活躍を推進している機関を表彰するために、2019年度に創設されたものです。

飯間助教は、造影剤を使用しない非侵襲的な拡散強調MRIを用いて、組織の微小灌流を評価できる定量値(IVIM)をはじめとするさまざまな画像の情報を新たに抽出して活用することにより、身体に負担の少ない安全で新たながんの画像診断法を開発したこと、研究以外の社会貢献においても、関連分野の国際ワーキンググループ創設など世界へ向け発信するとともに、国内外の研究者の交流活動の促進や後進の育成にも力を注いでいることが評価され、今回の受賞となりました。

飯間助教は、京都大学大学院医学研究科入学後、仏国ニューロスピン(超高磁場MRI研究所)への留学を経て、平成22年に医学博士の学位を取得しました。その後、京都大学白眉センター特定助教、同大学医学部附属病院放射線診断科特定病院助教、同臨床研究総合センター・放射線診断科助教を経て、令和2年より同先端医療研究開発機構・放射線診断科助教に就任し、現在に至っています。

なお、飯間助教の業績に対し、平成26年日本学術振興会育志賞、平成31年バイオインダストリー奨励賞などが授与されています。



(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

話題

## 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは10月27日(水)に、宇治市東消防署の協力のもと宇治市で震度6弱の地震が発生したことを想定した、総合防災訓練を行いました。

同訓練は、京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションしたものです。

今年度は情報伝達に特化した訓練とし、教職員で組織する自衛消防本部隊を中心に初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、避難状況の集計等、さまざまな場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践しました。

また、宇治市東消防署によるはしご車を使用した救助活動および同署指導による消火器操作訓練を行いました。

その後、宇治市東消防署からの講評に続き、宇治地区世話部局長である森井 孝 エネルギー理工学研究所長より挨拶があり、訓練は終了しました。



災害対策本部の様子



消火器操作訓練



はしご車を使用した救助活動



避難訓練の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

## 宇治キャンパスで2021年度安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは、宇治事業場衛生委員会主催、宇治地区総合環境安全管理センター共催による宇治事業場安全衛生講習会を宇治おうばくプラザきはだホールの会場とオンライン配信のハイブリッド形式で、11月19日(金)に開催しました。

## 話題

本講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は、大神 明 産業医科大学産業生態科学研究所教授を講師に迎え、「『作業環境と安全』～安全で安心な教育研究環境の構築について～」をテーマに講演していただきました。



講演を行う大神教授

挨拶する森井 孝 エネルギー理工学研究所長（宇治事業場総括安全衛生管理者）

講演では、作業環境管理およびリスクマネジメントの解説とともに、安全衛生環境を構築するために、リスクは「元から断つ」との考え方から、作業環境改善の方法と優先順位、リスクとハザードの考え方について説明がありました。特に、化学物質については、当時リスクが明らかではなかった物質による労働災害を例に挙げ、未知のリスク管理の検討において、「元から断つ」ことの重要性が説明されました。また、化学物質以外にも、レーザーや熱中症など幅広い作業環境条件下における作業環境管理の考え方について解説があり、事業場での作業環境管理、作業環境改善に資するものとなり、質疑応答では活発な議論が交わされました。

（宇治地区事務部）

[目次に戻る](#)

## 学生チーム「iGEM Kyoto」が 合成生物学の世界大会「iGEM2021」で金賞を受賞

「iGEM」の2021年世界大会が11月4日(木)～11月14日(日)にオンラインにて開催され、46か国から350チームが参加しました。本学からは学部生21名のチーム「iGEM Kyoto」が参加し、金賞を受賞しました。また、開発したソフトウェアはBest Software Tools賞の最終候補にも選出されました。

「iGEM」(The International Genetically Engineered Machine competition)は合成生物学の発展と学部生教育を目的として2004年に始まった世界大会です。参加チームは、年ごとに自由な発想のもとでテーマを決めて実験を行い、その成果を競います。

「iGEM Kyoto」は、iGEMを目指して研究活動を行う本学の学生チームで、2021年度は5学部から21名がメンバーとして集まり、学内外のさまざまな専門家に学びながら活動を行いました。今年度の大会に向けて、花の廃棄問題に着目し、「たくさんの方がもっと花を楽しめるようにしたい」という目標に向け、プロジェクト「FLOWEREVER」を立ち上げました(FLOWEREVER: 「Flower」と「Forever」から名付けた造語)。このプロジェクトでは、花の生産段階における病害・虫害を軽減することを主要な目標としながらさまざまなアプローチを試みました。さらに、これらのアプローチに必要な生体分子の効率的な生産を実現するために、大腸菌の非対称細胞分裂を利用した遺伝子の多段階発現システムの開発にも取り組みました。

## 話題

## 【関連リンク】

2021.igem.org (iGEM2021 ホームページ)

[https://2021.igem.org/Main\\_Page](https://2021.igem.org/Main_Page)

Kyoto: FLOWEREVER -A colorful palette of approaches for sustaining flower life- (2021) - Team Presentation [English] - iGEM Video Universe (iGEM Kyoto 2021 プレゼンテーションビデオ)

<https://video.igem.org/w/aDv1pt8xEAiCWssT995CwQ>

Team:Kyoto - 2021.igem.org (iGEM Kyoto 2021 Wiki)

<https://2021.igem.org/Team:Kyoto>

iGEM Kyoto

<https://igemkyoto.github.io/index.html>

(iPS 細胞研究所)

[目次に戻る ↗](#)

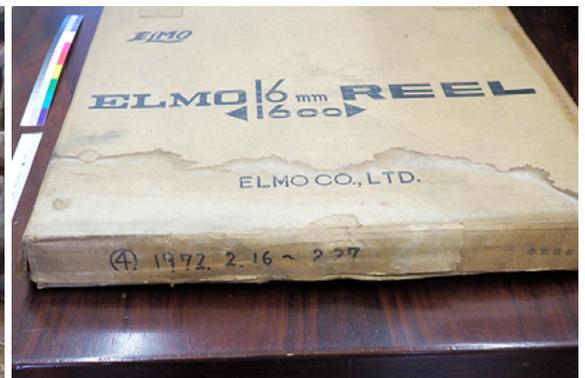
## 京都大学研究資源アーカイブが「京都嵐山ニホンザルA群全頭捕獲調査映像資料, 1971-1973」を公開

京都大学研究資源アーカイブでは11月15日(日)に、新しくデジタルコレクション(資料のデータベースと一部のデジタル化された資料)を公開しました。研究資源アーカイブは、本学における教育や研究のプロセスでつくられた資料群を体系的に収集・整理・保存し、「研究資源」として学内外で利用可能にする取組みです。今回公開されたのは、「京都嵐山ニホンザルA群全頭捕獲調査映像資料, 1971-1973」です。

京都嵐山に住むニホンザルの群れは、餌づけにより増加し1966年6月に嵐山A群・嵐山B群に分裂していました。その群れのうち嵐山A群は、1972年2月に全頭捕獲調査され、米国テキサスへ移送されました。本資料は、その調査時の記録映像です。移送前の1971年の準備から移送後の1973年12月の残されたB群を映した記録までが残っています。



捕獲調査時の様子  
[映画] (3)1972.2.12～2.16.  
(資料番号) CAAS MOV 2020/1/3



映画のリール収納箱  
[映画] (3)1972.2.12～2.16.  
(資料番号) CAAS MOV 2020/1/3

[出所・作成] 小山直樹

[資料年代] 1971年～1973年

[公開年] 2021年

[数量] 16mm 映画フィルム 6本, 各リール収納箱入り

話題

[メタデータ] 7レコード

【関連リンク】

京都大学研究資源アーカイブ

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

京都嵐山ニホンザルA群全頭捕獲調査映像資料, 1971-1973.

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/2428/>

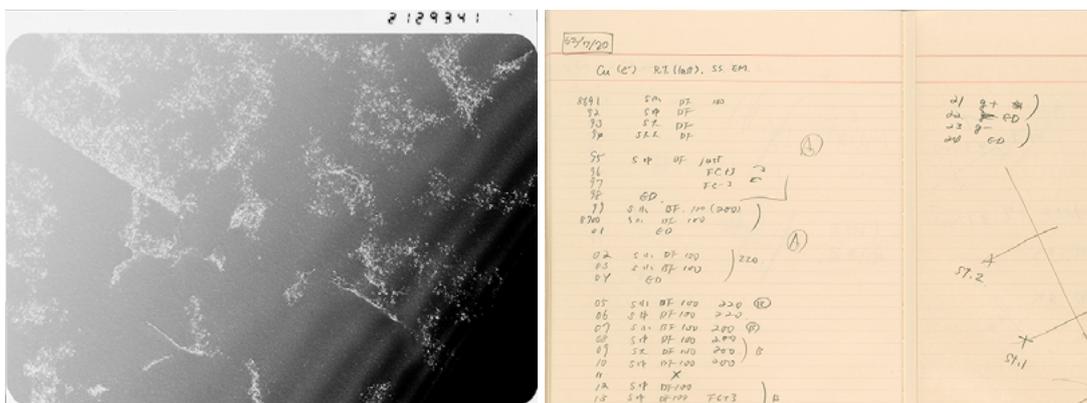
(総合博物館)

[目次に戻る ↗](#)

## 京都大学研究資源アーカイブが「高エネルギー粒子照射材料透過電子顕微鏡写真, ca.1985-1997」を公開

京都大学研究資源アーカイブでは12月1日(水)に,新しくデジタルコレクション(資料のデータベースと一部のデジタル化された資料)を公開しました。今回公開されたのは,「高エネルギー粒子照射材料透過電子顕微鏡写真, ca.1985-1997」です。

高エネルギー粒子の材料照射実験は,材料に欠陥を導入する手段として,また照射下で使用される材料の特性試験として幅広く行われています。本資料は,金属材料を中心としたさまざまな材料に高エネルギー粒子照射を行いその後電子顕微鏡観察した結果を記録した写真のネガフィルムです。幅広い実験条件を網羅するだけでなく,現在研究用等原子炉や加速器などの照射設備の運転停止や運転条件変更により実施できなくなった実験条件で得られた,希少な照射材料の撮影結果を含んでいます。



[ネガフィルム, O シリーズ] O-29341. Cu-0.3Ge, G641, RTNS-II, 200°C, SS, BF, 21K. [記録ノート, L シリーズ] 大洗 200CX EM ノート L-2 北大. 7784 ~. (資料番号) O-29341 (資料番号) L-2 (28 ページの部分)

[出所・作成] 義家敏正; 京都大学複合原子力科学研究所照射材料工学研究分野

[資料年代] 1985年~1997年

[公開年] 2021年

[数量] 写真ネガフィルム 63,351枚, 記録ノート 62冊

[メタデータ] 63,426レコード

※なお, デジタル化された写真は,「資料利用例」の54件に限られます。写真情報のデータベースとしてご利用ください。



【関連リンク】

京都大学研究資源アーカイブ

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

高エネルギー粒子照射材料透過電子顕微鏡写真, ca.1985-1997.

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/2324/>

(総合博物館)

[目次に戻る ↗](#)

## 訃報

このたび、上田國寛 名誉教授、富永茂樹 名誉教授が逝去されました。  
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

## 上田 國寛 名誉教授

上田國寛先生は、9月5日逝去されました。享年81。

先生は、昭和40年京都大学医学部を卒業、1年間同附属病院でインターンの後、医学研究科博士課程に進学、同45年3月に同課程単位取得退学、同48年5月には医学博士の学位を取得されました。昭和45年9月に京都大学化学研究所助手（医学部助手併任）に採用され、同56年3月医学部講師、同60年10月医学部助教授を経て、平成6年4月より化学研究所教授に就任し、生体反応設計研究部門Ⅲを担当されました。平成16年3月に定年退職され、同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられました。その後、神戸常盤大学の学長を10年間務められました。

先生は長年にわたり、自ら発見した第三の核酸ポリ（ADP-リボース）とこれによる核蛋白質の修飾〔ポリ（ADP-リボシル）化〕の基礎および臨床研究に従事されました。世界でこの分野の研究に先導的役割を果たし、最初の単行本“ADP-Ribosylation Reactions”を編集し、著名な総説誌 Annual Review of Biochemistry に2回執筆の機会を与えられるとともに、その業績に対して、日本生化学会奨励賞、日本ビタミン学会賞等を授与されました。一方、昭和60年臨床検査医学の助教授となって以降、臨床領域の遺伝子診断にも先駆的に取り組み、アルツハイマー病やパーキンソン病に特徴的な遺伝子多型や変異、遺伝子発現の変化を発見、遺伝子診断への道を開き、日本遺伝子診療学会の理事長も務められました。また、平成6年から9年間日本学術会議研究連絡委員、平成12年から厚生（労働）省「ヒトゲノム解析研究に関する共通指針（案）」検討委員会の委員を務め、研究行政面にも貢献されました。

（化学研究所）

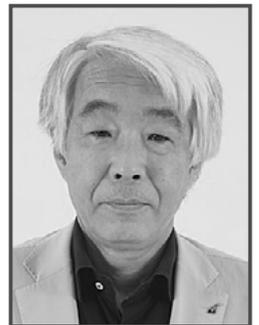
[目次に戻る ↗](#)



## 富永 茂樹 名誉教授

富永茂樹名誉教授は、12月8日に逝去されました。享年71。

先生は、昭和48年3月に京都大学教育学部を卒業、同50年3月同大学大学院文学研究科修士課程（社会学専攻）を修了、同55年3月に同博士課程単位取得満期退学、同年4月に京都大学研修員（文学部、日本学術振興会特別研究員）に採用され、同56年4月より長崎大学講師（教養部）、同59年4月京都大学助教授（人文科学研究科）を経て、平成12年4月には同教授に昇任、同14年3月に京



## 訃報

都大学博士（文学）の称号を授与されました。

人文科学研究所においては西洋文化部門（平成12年4月の研究所改組後は文化生成研究部門）に所属し、この分野での研究を主導されるとともに、京都大学大学院文学研究科において長年にわたり学生・大学院生の教育・指導に尽力されました。学外では、平成14年から京都芸術センター運営委員会委員長（平成21年からは同センター館長）に就任したのをはじめ地方自治体の文化・教育行政の分野で広く活躍されました。

先生の研究分野は知識社会学です。主たる研究対象は18世紀から現代にいたるフランスを中心とした文化と思想であり、『資料 権利の宣言—1789』（人文科学研究所，平成13年），『転回点を求めて—1960年代の研究』（世界思想社，平成21年），『啓蒙の運命』（名古屋大学出版会，平成23年）等卓抜した成果をあげられました。なかでも平成17年に刊行された『理性の使用—ひとはいかにして市民となるのか』（みすず書房）は、シエイエスやカントなどの政治哲学における「市民」概念、フィリップ・ピネルの精神療法、フランス革命期の「民衆協会」の試みと挫折、18世紀におけるサロンと民衆協会の集団構造上の類似と差異、活字印刷と社会的主体の形成など、「フランス革命と近代的主体の成立」のさまざまな局面に目を向けて、革命当時のパンフレットや議会の議事録等のテキストの綿密な読解を踏まえたうえで解析した労作として高い評価を得ました。また、先生は、フランス政府給費生、同研修員、文部省在外研究員として主にパリに長期滞在し研究に携わるとともに、海外研究者の招聘にかかわり、研究集会を開催されました。さらに、フランス社会科学高等研究院の客員教授（平成16年）として授業を行うなど、海外の研究者との学術・研究交流に尽力されました。これらの活動が評価されて、平成17年にはフランス共和国からパルム・アカデミック章・オフィシエ級を授与されました。

（人文科学研究所）

[目次に戻る ↗](#)

京大広報  
No.760

令和4年1月25日 発行

発行 京都大学総務部広報課  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。  
「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。  
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



2022年、京都大学は創立125周年  
URL:<https://125th.kyoto-u.ac.jp>